

詩編 23 : 1～6

ヨハネによる福音書 11 : 17～27

「復活・命」

<イースター>

イエスさまは、言われました。「わたしは復活であり、命である」。

この御言葉は、今日の聖書の中においては、イエスさまが十字架に架けられ、復活なさる前に語られた御言葉です。「わたしは復活であり、命である」。

イエスさまはこの後に、捕らえられ、裁判にかけられ、十字架に架けられて死に、お墓に葬られていきます。しかしイエスさまは、死んでから三日の後、お墓の中から、死者の中から、神の力によって復活されたのです。

今日はイースターですが、イースターとは、そのイエスさまの復活を喜び祝い、神さまを礼拝する日です。

どうして、わたしたちがイエスさまの復活を祝うのか。それは、復活とは、昔々、ただイエスという人が復活した素晴らしい奇跡、というだけの出来事ではないからです。その出来事が、ただ 2000 年前に起こった、というだけなら、それはすごい出来事ですけど、今を生きるわたしたちには何の関係もないことです。

しかし、イエスさまの十字架の死と復活は、わたしたち、すべての人間のために起こったことなのです。わたしたちのためになされた、神さまの救いの御業なのです。

<死の只中で>

この世を生きているわたしたちは、いつも、死と向き合っています。束の間、忘れていることがあるかも知れません。しかし、親しい人に死が訪れることがあります。またいつか死は、必ず自分自身にやってきます。死が、すべての人に例外なく訪れることを、わたしたちは知っています。

死の存在感、またその力は、とても大きく思われます。わたしたちは実際、死の前では、何もなす術がありません。死を思うと、それは最後にすべてを飲み込みこみ、すべてを取り去っていくものようであり、わたしたちは、生きることの意味や、目的までも奪われるように感じます。そして、わたしたちの気力を失わせ、大きな悲嘆に暮れさせるのです。

今日の聖書に出て来るマルタとマリアという姉妹もまた、大切なラザロという兄弟を病気によって亡くしてしまったところでした。墓に葬って、もう四日も経っていました。この残された二人の姉妹のところには、多くのユダヤ人が慰めに来ていた、とあります。

愛する者を亡くした人たちの悲しみを、ぽっかり穴が空いてしまったような気持ちを、周りの人々は、何とか慰めたい、少しでも癒したい、と切に願います。しかし、そのような時

にかける言葉は、中々見つかりません。慰めに来た人々もまた、死の前では同じように無力であり、同じように恐れており、いったい何が慰めになるのか、何が悲嘆に暮れている人々に新しい力を与えることが出来るのか、分からないからです。

<来られたイエスさま>

その、死の悲しみの只中に、イエスさまがやってこられました。この姉妹たちは、イエスさまが神から遣わされた救い主であることを、信じていました。だから、ラザロが病気になった時には、イエスさまのところに人をやって、癒して下さることを願ったのです。しかし、イエスさまはすぐには来て下さりませんでした。そして、待っている間に、ラザロは死んでしまったのです。それで、マルタはイエスさまに言いました。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

あなたが来て下さらなかつたから、ラザロは死んでしまった。あなたは神の御子で、何でもお出来になるのに、ラザロが死ぬ時、ここにいて下さらなかつた。これは、マルタの恨み言のようにも聞こえます。

わたしたちもまた、必死に願った。必死に祈った。しかし、思いが聞かれなかつたと、神さまに恨み言を言ったことがあるかも知れません。

でもマルタは、続けて「しかし」と言うのです。「しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

それでもマルタは、このイエスさまから、何かしらの慰めを頂けるのではないか。救いを頂けるのではないか。この行き場のない悲しみを、この方が受け止めて下さるのではないか。そう期待して、なおイエスさまにすがり、求めているのです。

このマルタに、イエスさまは言われました。「あなたの兄弟は復活する」。

マルタは答えました。「終わりの日の復活の時に復活することは存じております。」

当時、ユダヤ人のファリサイ派と呼ばれる人々は、この世の終わりの日、神さまの裁きの日に、神の民は復活させられると信じ、そう人々に教えていました。だからマルタは、そう、教えられていることは知っている、と答えたのです。ラザロが死んで、わたしも死んで、何世代も時が過ぎて、いつか、終わりの日が来た時に、復活があると知っている。

しかしマルタにとって、それはいつ起こるか分からない、遠い将来の話です。

しかし、イエスさまはここでマルタに、「復活」ということが、単なる教えなどではなく、また、将来の、終わりの日の約束以上のことであることを示されました。

わたしたち教会もまた、世の終わりの日に、わたしたちに復活の体を与えられる、と信じています。それは、確かな約束です。しかしそれは、そういう予定である、ということだけ

ではありません。復活は、将来の約束のことで、今の自分とは直接関係ない、ということではないのです。

<復活であり、命である方>

イエスさまは言われました。「わたしは復活であり、命である。」

ここにいるわたしこそが、復活である。このわたしが、命である。イエスさまという方の存在そのものが、復活であり、命であると言われたのです。それは、いつか遠い未来に起こる、かすかな期待ではない。単なる教義的な教えではない。今ここに、復活であるわたしがいる。今ここに、命であるわたしがいる。

そして、イエスさまは言われました。「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

イエスさまご自身が復活なのです。イエスさまご自身が命そのものなのです。そうであるなら、わたしたちは、この方と出会い、この方を信じて生きるなら、その時からすでに、復活と、まことの命に与って生きる者となるのです。イエスさまの復活の力と、イエスさまの命に包まれて、この世を生きる者となるのです。

イエスさまを信じるとは、イエスさまと一つに結ばれることです。イエスさまに繋がれて、その命に生かされる者となる、ということです。わたしたちは、この方を信じて生きるなら、地上の限りある命を生きながら、イエスさまの復活と永遠の命の中に、生き始める者となるのです。

イエスさまは、悲しみの只中にあるマルタと共に、死に捕らわれているラザロと共に、おられます。復活であり、命であるイエスさまが共におられます。イエスさまは、今この時から、わたしの復活によって生きよと。わたしの命に生きよと言われるのです。

いつか来る終わりの日ではなく、今、この人生の中であって、わたしたちの体も、心も、魂も、存在すべて、まるごと、イエスさまの復活の中に、永遠の命の中に置いていただくことが出来るのです。

この方が、共にいて下さるなら。復活と、命そのものである方が、わたしを捕らえていて下さるなら。わたしたちは、死によって、何も奪われることはないのです。イエスさまと結ばれているわたしを引き離すものは、何もないのです。

イエスさまは、わたしたちを罪から、滅びの死から、解放するために来て下さったお方です。わたしたちがこの方にすべてをお委ねするなら、この方は、決してわたしたちの手を離されることはありません。イエスさまの命にしっかりと結ばれていく。イエスさまの命の中に、生きていく。これが今、わたしたちに与えられている、恵みです。救いの現実です。

「わたしは復活であり、命である。このことを信じるか。」

わたしの復活に、わたしの命に、この救いに、あなたは自分を委ねるか。わたしの復活の命を信じ、この命に生きることを望むか。

イエスさまは、そうマルタに、そしてわたしたちに、問うておられるのです。

<はい、主よ>

マルタは答えました。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

マルタは、信じると言いました。愛するラザロは、死んだままです。イエスさまご自身の十字架の死と、復活の出来事も、まだこの後の話です。

しかし、マルタはここで、死の力よりも、復活と命であるイエスさまを信じたのです。受け入れ、すべてを委ねたのです。なぜなら、復活と命が、マルタの目の前にあるからです。イエスさまが、マルタの目の前におられるからです。今、御言葉を下さり、信じるか、と問うて下さったからです。

この後、イエスさまは、死んだラザロを復活させて下さいます。それは、イエスさまが復活であり、命であることが、本当であることの「しるし」として行われた奇跡です。

今のわたしたちには、もうこのような「しるし」は与えられません。死んでしまった、愛する人が、復活するような奇跡を見ることはありません。

なぜなら、今のわたしたちには、イエスさまご自身が成し遂げられた、十字架の死と、復活の出来事が知らされているからです。イエスさまが、わたしたちを支配する罪と死に勝利して下さり、まことに復活であり、命であることが、その十字架の死と復活の出来事によって、確かなこととして、はっきりと告げ知らされているからです。

わたしたちもまた、礼拝において、御言葉を通して、復活のイエスさまと出会い、イエスさまの復活の命に与り、死で終わることのない命を生き始めることが出来ます。今ここから、イエスさまの復活の命の恵みに、生きていくことが出来ます。

そして、わたしたちは、終わりの日の救いの完成と復活の希望を見つめるだけではなく、この生きている日々の生活の中で。この人生の営みの中で。苦しみや、悲しみや、様々な困難がある歩みの只中で。共にいて下さるイエスさまの復活の力、命の力によって、新しくされ、立ち上がらされ、癒され、慰められ、歩んでいくことが出来るのです。イエスさまの復活の命を、現実のものとして味わいつつ、力づけられ、生きていくことが出来るのです。

イエスさまは、わたしたち一人一人にも出会って下さり、語りかけてこられます。

「わたしは復活であり、命である。このことを信じるか」。

わたしたちは、このイエスさまの御手に、自分の命を、存在のすべてを委ねて良いのです。そして、愛する人の存在をもまた、すべて、委ねて良いのです。自分の命も。今共に生きている者の命も。すでに亡くなった、愛する者の命も。復活であり、命である方に、信じて、その御手にお任せして良いのです。この方に希望を持って良いのです。この方にすがり、この方に救いと慰めを求めて良いのです。

イエスさまは、必ず応えて下さいます。あなたを生かし、罪を赦し、その救いの御手の中

に、復活の命の中に、しっかりと捕らえて下さいます。

たとえわたしたちの力が失われていっても、弱っていっても、わたしを生かすイエスさまの復活の命は、何も損なわれることはありません。むしろ、そのイエスさまの命は、救いの恵みは、ますます力強く働くことでしょう。

わたしたちも、「このことを信じるか」と問うて下さる、復活のイエスさまを今見上げて。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」。そう、お応えしたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを罪と死から救い出すために、神さまの御子であるイエスさまが、十字架に架かって死んで下さったこと。そして、死の中から復活させられ、イエスさまこそ、すべてに勝利された、命の支配者であることを示して下さいたことを、心から感謝いたします。

わたしたちの目には、苦しみや、悲しみや、死の現実が、わたしたちを支配しているように思われます。しかし、復活であり、命であるイエスさまこそが、すべてを支配しておられます。イエスさまが共にいて下さるなら、わたしたちは、イエスさまの命に与り、復活の命に、永遠の命に、生きることが出来ます。

どうか、この救いの恵みを、信じさせて下さい。わたしたちを、何にも動かされない、何にも奪われない、イエスさまの命に生きる者として下さり、この命によって、日々を、希望と、慰めと、平安の内に、生きる者として下さい。

復活の主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン